

令和6(2024)年6月27日



葛城市立新庄北小学校

トベラの木



学校だより No. 2

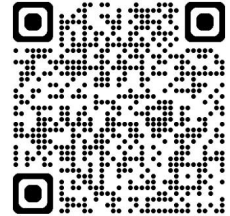
校長 中川 純一

6月23日 沖縄慰霊の日

戦争の恐ろしさや平和の大切さ、いのちの尊さ、

そして、今自分にできることを考える

6月23日、沖縄全戦没者追悼式で朗読された宮古高校3年生の
仲間友佑さんの詩「これから」の全文です。



平和の詩「これから」

「これから」

短い命を知ってか知らずか 蝉が懸命に鳴いている
冬を知らない叫びの中で 僕はまた天を仰いだ

あの日から七十九年の月日が 流れたという
今年十八になった僕の祖父母も戦後生まれだ それだけの時が流れたというのに

あの日 短い命を知るはずもなく 少年少女たちは誰かが始めた争いで
大きな未来とともに散って逝った
大切な人は突然 誰かが始めた争いで 夏の初めにいなくなった
泣く我が子を殺すしかなかった 一家で死ぬしかなかった
誰かが始めた争いで 常緑の島は色を失くした 誰のための誰の戦争なのだろう
会いたい、帰りたい 話したい、笑いたい
そういくら繰り返そうと 誰かが始めた争いが そのすべてを奪い去る

心に落ちた 暗い暗い闇はあの戦争の副作用だ
微かな光さえも届かぬような 絶望すらもないような
怒りも嘆きも 失くしてしまいそうな 深い深い奥底で
懸命に生きてくれた人々が
今日を創った
今日を繋ぎ留めた
両親の命も 僕の命も 友の命も 大切な君の命も すべて

心に落ちた あの戦争の副作用は 人々の口を固く閉ざした
まるで 戦争が悪いことだと 言ってはいけないのだと 口止めするように
思い出したくもないほどの あの惨劇がそうさせた

僕は再び天を仰いだ 抜けるような青空を 飛行機が横切る
僕にとってあれは 恐れおののくものではない
僕らは雨のように打ちつける 爆弾の怖さも 戦争の「せ」の字も知らない
けれど、常緑の平和を知っている
あの日も 海は青く 同じように太陽が照りつけていた
そういう普遍の中にただ 平和が欠けることの怖さを 僕たちは知っている

人は過ちを繰り返すから 時は無情にも流れていくから
今日まで人々は 恒久の平和を祈り続けた
小さな島で起きた あまりに大きすぎる悲しみを 手を繋ぐように 受け継いできた

それでも世界はまだ繰り返してる
七十九年の祈りでさえも まだ足りないというのなら それでも変わらないというのなら
もっともっとこれからも 僕らが祈りを繋ぎ続けよう 限らない平和のために
僕ら自身のために 紡ぐ平和が いつか世界のためになる そう信じて

今年もこの六月二十三日を 平和のために生きている その素晴らしさを噛みしめながら

図書室前に・・・

学校では、子どもたちに平和の詩を放送や昇降口に掲示するなどして紹介しました。

また、戦争の恐ろしさや平和の大切さ、いのちの尊さを考えられるように、戦争と平和に関する本を気軽に手に取れるように、図書室前に並べています。

是非、ご家庭でも「戦争の恐ろしさや平和の大切さ、いのちの尊さ、そして今自分にできること」を考えるきっかけにしていだけたらと思います。

沖縄戦豆知識

第二次世界大戦末期に行われた、日本軍とアメリカ軍との沖縄をめぐる激戦。多数の一般市民を戦火に巻きこんだ。沖縄戦は、1945（昭和20）年3月、航空戦と那覇の空襲で始まった。

4月1日のアメリカ軍の嘉手納上陸で本格化した戦闘は、約11万人の日本軍戦死者と、10万人におよぶ民間人の死者を出して、6月23日に終わった。

死者の中には、義勇軍に参加した中学生や野戦病院で看護にたずさわった高等女学校生（ひめゆり部隊）などの青少年もいる。

ありがとうございます
ございます

